

# 井手平城 千人塚修復調査プロジェクト

2023年3月21日

佐世保史談会 垣田鉄郎

佐世保市新替町にある薬王寺は戦国時代に井手平城と呼ばれる城があった事で知られている。平戸松浦領の最南端に築かれた山城であったが、1586年(天正14年)に大村・有馬氏、西有田・波多などに攻められ落城した歴史がある。

城の一角に千人塚と呼ばれる史跡があり、約50基程の古い石塔が並んでいる。長年の山の斜面からの堆積物により、傾いているものや組み合わせが明らかに違うものなど少々乱雑に並んでいる。おそらくはある時期に周辺にあった石塔を一箇所にまとめたのだろう。井手平城落城の際の戦死者のものと言い伝えられ、落城以前の年号の石塔もあることから周辺に寺院があったのではないかと云われている。

今回、九州宇鴻有限会社の山口さんを中心に市内の石材業者の方々が集まり、文化財課と大石先生の指導のもとに石塔の修復作業がおこなれた。私もメンバーの一員に入れさせていただき、数回だが修復作業を見学することができた。日程表を元に大まかな作業工程を書いてみる。

作業は2月2日～21日かけて6回行われた。石塔の種類は主に板碑・五輪塔・宝篋印塔である。

まずは五輪塔・宝篋印塔の部材にナンバリングし、大石先生の指導のもとに石種(緑色片岩・安山岩・砂岩塔)や年代別に整理し組み直したものを元の場所へ復旧する。その際に割れている石材は接着復元を行う。板碑は傾きを修復し、全体的に清掃・木の根を取り除き基壇部分を組み直しする。板碑・五輪塔・宝篋印塔の寸法計測、CADデータ化、銘文清掃、拓本、画像データ化。等々、実際に作業に参加していない私がわかっているだけでも以上のような作業が行われている。

何より私が感心したのは、皆さんがボランティアで活動しているということだった。なんとかして自分達の時代で乱雑化した石塔を元の姿に近い形に修復して、また次の世代へ受け継いでいこうという、石を扱うプロとしての皆さんの熱い思いが伝わってきた。



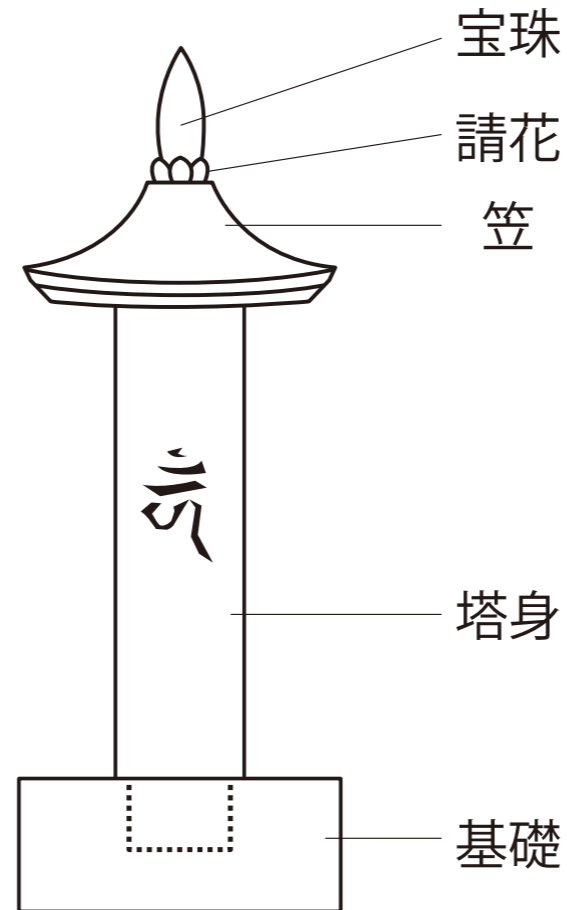
# 今回のプロジェクトで新たに発見された遺物

## 1. 笠塔婆の塔身(滑石製)

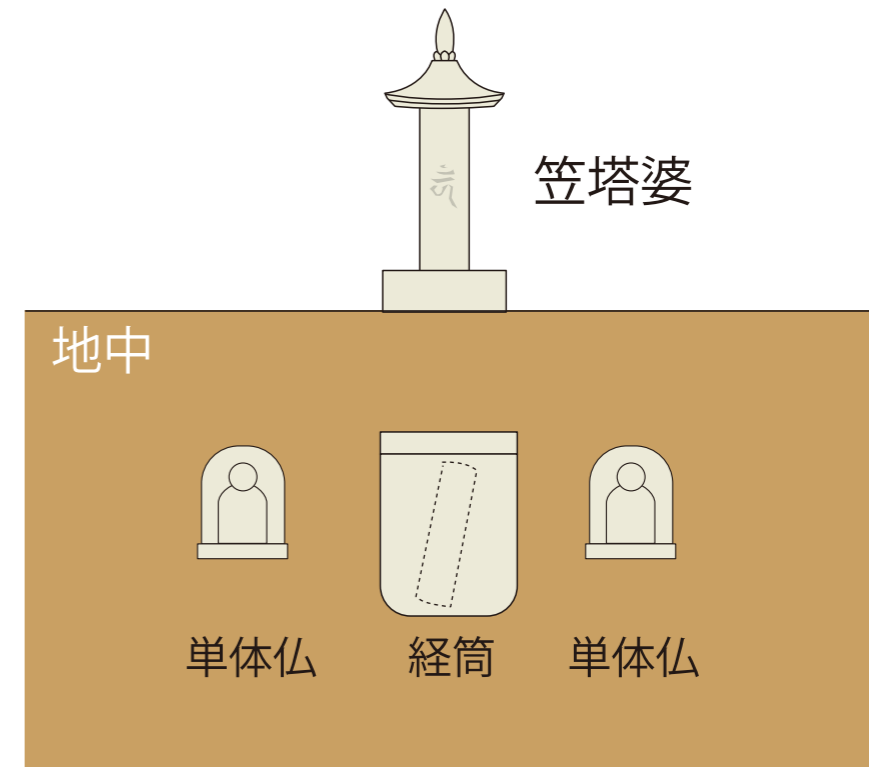


平安時代後期、西暦1100年代

笠塔婆 想像図



笠塔婆の使用想像図



### 笠塔婆

平安末期、末法思想により、地中に経文を入れた経筒を埋め仏教の復活を願った。その際に経筒の両横に单体仏を置いた状態で地中に埋めて、その上に笠塔婆を置いて地上標識とした。

ただし、この経筒と傘塔婆の関係性はまだ証明されておらず。研究段階との事。

## 2. 分銅(緑色片岩)

中世末期に使われていたと思われる物の重量を測る時に使用されたおもり五輪塔の風空輪によく似ているため他所から混ざって来た可能性がある



## Topic

千人塚の側を流れる小森川を4.5kmほど下った河口付近には「三島山」がある。

そこからは古墳時代の遺物と平安末期の「経筒」が出土している。

大石先生によると以前、広田町にも傘塔婆が2~3基あったとの話を聞いたことがあるとの事で、先生自身も見た記憶があるが、その後「これは地下に埋めておいた方がよい」とのお坊様の助言でどこかに埋められたらしく、それ以降行方が解らなくなったとの事。もしも三島近辺で傘塔婆が出土したのであれば、上図のような経筒との関係性が証明できるきっかけになるかもしれない。

広田で行方不明の傘塔婆は、いつ広田のどこで見つかったものなのか、そしてどこに埋められているのか、興味深い話である。

# 今回のプロジェクトで再注目された石塔

## 1.五輪塔の地輪(緑色片岩)



法音開山鑒源和尚大禪  
千峯文明六年 甲午二月十三日

薬王寺の記録には寺の前身は背後の山中(洞谷山どうこくざん)にあった**養性庵**(ようじょうあん)で、開山は**文明四年(1472)**に入寂した大虚舜道(たいげしゅんどう)と伝える。場所も開山した年も違うのでこの五輪塔と養性庵とは無関係だと思われる。

銘文には**文明6年(1474) 法音開山**と刻まれている。

1400年代に**法音**という名の中世寺院が近辺にあったことを示すもので、その時期に緑泥片岩の石塔建立ができる財力を持った名主層や宗教思想がこの地に育っていたことを示す遺品である。(佐世保市史跡探訪より一部抜粋)

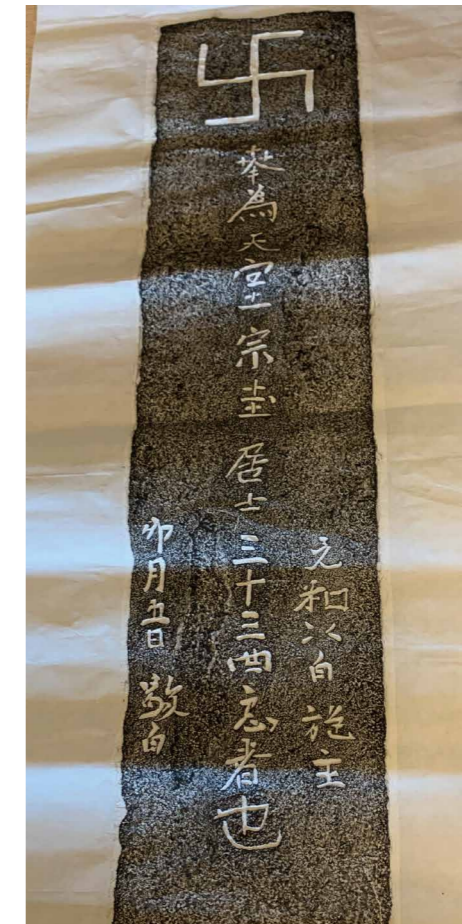
～平成11年度「井手平城跡発掘調査報告書」から抜粋～

この石塔群の中で特筆すべき遺品といえば、文明6年(1474)銘の五輪塔地輪(緑泥片岩製)である。この地輪は、銘文中の「法音開山鑒源和尚大禪」から、鑒源和尚という僧侶のための五輪塔であることがわかる。と同時に千人塚を含めた井手平城跡周辺に中世寺院(庵を含む。宗旨は禅宗か?)があったことを示唆する遺品でもある。

※宗旨(しゅうし) = その宗教・宗門の教えの中心になっているところ。  
宗教の流派。宗門。比喩的に、その人の奉ずる主義主張・生き方・好みなど。

※禅宗(ぜんしゅう) = 禅の修行によって人間としての真の生き方を悟ろうとする、仏教の一派。  
臨済宗・曹洞宗・黄檗宗に代表される座禅を用いた修行を行う仏教の宗派。

## 2.石塔(緑色片岩)



奉為 天堂宗圭居士三十三回忌者也  
元和四年施主  
四月五日敬白

大石先生による拓本作業で  
綺麗に浮かび上がった文字

元和4年(1618)に33回忌を供養して建てられた石塔。

天堂宗圭とは戒名もしくは経文か題目のようなものだろうか、おそらくは井手平城合戦の33年後に戦死者を祀った供養塔であろう。

元和4年(1618)から33年遡ると天正13年(1585)になり、井手平城合戦(天正14年)との1年のずれが生じる。しかし仏教による追善法要は亡くなって2年目を3回忌と称す事から、井手平城合戦戦没者の33回忌は元和4年(1618)で合っているともいえる。

## Topic

元和4年(1618)といえば大阪夏の陣から3年後、まだまだ戦乱の血生臭さが残る世の中だが少しづつ太平の世へと変わりつつもある。当地ではこの時期から供養塔(特に砂岩製の板碑)などが多く建てられる。その初見ともいえる価値のある石塔ではないだろうか。

※居士(こじ) = 男子の戒名の下につける称号の一つ。  
信士・信女よりも仏教に対する信仰度や寺院への貢献度が高かった方に対して授けられる位号。  
もともと、貴族や武家など上流階級の家柄の方のみが対象とされた位号といわれている。

# 作業風景



# プロジェクト以前の千人塚



# プロジェクト後の千人塚



3月28日の長崎新聞に掲載されました

井手平城跡千人塚修復調査プロジェクト

# 佐世保最古の石塔発見

県内の石材業者や石造物研究者など有志が、ボランティアで佐世保市新替町の井手平城跡ふもとにある千人塚の修復、調査に取り組んだ。県内で最古級、同市では最古の石塔の一部が発見されるなど、城跡一帯の新たな歴史も明らかになった。

同市などによると、戦国時代末期の1586年、平戸松浦氏の最前線の城だった井手平城は大村氏ら連合軍の夜襲に遭い、城主だった岡甚右衛門や副将の堀江大学などが打ち取られ落城した。連合軍はさらに広田城を攻めたが、平戸松浦氏は撃退し、井手平城も奪還。この戦いで

戦死者を弔うため城のふもとに薬王寺を建てたという。千人塚にある墓も戦死者のためにつくられたといわれ、同寺が所有している。

同市で石材業を営む「九州宇鴻」の社長、山口栄さん(59)は、昨年6月に堀江大学の子孫から同城跡にある堀江の墓の修復依

頼を受けた。作業時に通る千人塚の墓が崩壊している様子を見て、自主的に修復を決意。薬王寺の許可を得て市に問い合わせ、石造物研究者の大石一久さん(71)と大村市に紹介を受けた。今年2月、6回にわたり作業を実施。散乱している部材を本来の姿に戻すため、大石さんが組み合わせを分析。それに基づいて山口さんらが石材用接着剤を使って固定するなどして、59

基を修復した。墓石を整理する中で、平安時代末の1100年代後半ごろの滑石製笠塔婆の塔身が見つかった。大石さんによると県内で最古級、佐世保市では最古の石塔になるという。この発見で、当時同所では末法思想に関する宗教文化がある程度波及しており、それを受け入れる有力者がいたこと、土地開発がある程度されていた可能性があることが推察される。

## 新たな歴史も明らか



今回の作業で見つかった滑石製笠塔婆の塔身 (井手平城跡千人塚修復調査プロジェクト提供)



修復した墓石を前に写真に納まるプロジェクトメンバーら =佐世保市、千人塚

また、県内3例目となる「重り」の発見もあり、これが竿秤の分銅であれば極めて珍しい遺物となる。分銅であれば同所が商業上繁栄していたことが想定されるという。大石さんは「珍しい遺物も見つかり歴史学的にも貴重な成果があった。山口さんの功績は大きい」とたたえた。

山口さんは「多くの人の協力のおかげで想像以上にきれいになった。将来、倒壊などがあつたときのために写真や図面を資料として残しておこうと思う」と話した。同市文化財課の担当者「民間の方がボランティアで史跡の保存活動を行うことは珍しく、素晴らしい取り組み」と話す。今後、同プロジェクトは調査報告書を同市などに提出する。(堀内優子)